豊後朱拙此春ハ登り
あんぎやに来りしに
かろとけに乱れ踊るべき花の陰　（風国）
照るをこちらへくれよ番下し
照るのふみちらしたる菜畑に
菱の葉ひあつまるや池の魚
菜畠に二録のくすりや雉の声

風国

夏

相国寺にて
雉此所すゞむ熱さかな
山門に風とる女や小商人
国の名に開く牡丹のめでたさよ
蚊ぎらひや女の斧に石をわる
鳥なして青葉を出る　許公

淀
舟棹のとゞく限なり　許公
五月雨のせいをくゞりて月夜かな
闇へいつてゆきゝの里や　許公

ガラス使用

秋

駕籠かきよの佛兄弟や玉まつり
秋もはや萬こと知らず夜ぶ久能
七夕や舟もい遊ぶり金の煙
さみやきを皆そりたてし路の追

初秋の句を

名月や拝ぬ雲にかへしあず
松の葉や霜たも似ず秋の夜
三日月の秋をとらぶや家の上
鶉かよのくしきともはずり秋の暮
月清むやせ世の荒も御几かし

先師芭蕉の荒の御病なりしと
大津にたて下されけるを出て

やご宮み茄子の花も木末うれ

風国

（風国）

ガラス使用

菰柳舎

聖霊と荷つられぬん軒の鳥（風國）
蜻蛉やさゝらをこする土塀の上
稲陰や飯しまるぎ烟のやれ
海山のふくたりやけさの秋
名月や泣顔見たしかくや姫
送火や大小さして川の中

風国

冬

金剛寺

物売の急に成たる寒さかな
野川の一流にかゝりし寒さかな
軒口を上手に飛や鶺鴒
牛はりに男ハやりぬもち時分
旧年を蹴ちらかしつ市の人
冬枯に身をなげこむや渡り鳥
静さハ森松枯れそしれ哉
初雪にかくれあふする菜の青み
今様も知らぬハ淋し大根引
小春とて隙のくれたる時分

ガラス使用

初雪や猫を乞食も家子有（風国）
片はらにいるむ簀の戸や冬の月
門火焚く袂子窗の時雨かな

春

蕉門
草壁峯白（元禄中没）

勝聲はいうす苦しき雞合
新田にならで中〱汐干かな
手にとれどさのみよごれぬ田芹かな
駒嶽のとせうに見せたる雪間かな
白梅にかくすゑもなし古男
年〱の顔こそかはれ桃の宴
這出でゝ草に背をする蛙かな
笠うち越せバ根の流を柳かな
下葉〱を寒じるせん雨の蝶
いつ〱ぐり花るは沈む函の中

ガラス使用

咲くも散るも一本つゝせよ山桜（峯白）
眠つても晝ハ折れぬ桜かな

夏

獨り寝の紙帳の中のへらず口
白雲の愛宕ハ冷る新茶かな
根ハ只に若葉より上の牡丹かな
為あれハ[illegible]無しや夏木立
香ヲ折ルの里沢や杜若かな

峯白

ガラス使用

秋

白露の袖のむしろか女千草也

賀をつゞの寿や引らん小菊栗

二所に月見る人の住居かな

帰るさに攬き咲ひ秋雉也

鶏鳴きて雲に声ある山路也

木賀山中　秋よ花少き家をたゝく雨

なでし華や梶の葉にたゝし二つ星

女郎花二人比丘尼はいづこ行く

峯白

峯白

冬

送芭蕉

何方にねて遊ぶらんすゝ掃ひ
鰤はかり霙にそはへたる重し
時雨くに騒かり並かんその庵
もしりあふ市の笑ひや年の暮
其の戸や傘すぼすらぬ宿の暮
霜にハ老ひ見れよ柿かつき
落葉見に誰が帰せし霜馬峰（サクリ）
若枯て雪を有のと降るにし
月花のゆすつくん錦もしら
ことさらに時雨るる命　沈魚年

（峯白）

洒（ゼバ）堂珍碩（タイ）（元禄中没）

春

あ業や蛇のゆふべの重き哉

（春）いそうきいおちを雀のかき落し

桜さくや朝い牛の白いさへ

水音の池中淋しき柳かな

花おちて[illegible]の出見る瀬の安さ哉

色々の名もまぎらはし春の草

日の影やてらうの上の親雀

春雨や火燵につゝまん雛の夢

田歌の合対で山吹ちるか祭の鱠（なます）

行春をゆくゝいの菴和侍けり

鶯や京の舘もしづめの春（珍夕）
筆にははのちからあらはれぬ
飯鮹の手足やつれて桜鯛

洒堂珍碩

夏

吹かねども風もち芥子の乱れせわし
蕗の葉に鳴出る蛙や入梅晴
梅かけて中に涼しき暗子かな
菖蒲かけ見りや五月の風乃色（大阪洒堂）
閑たるなくや情の月かゝり時
借佛の衞を流れ流りの笹しら
門前の持備も浅し芥子の花
智恵のある人にハ見せ芥子の花
細脛のやすめどころや夏乃山

（珍碩）

秋

名月の海より冷る田簑哉

名月や誰吹起す森の鴉

人に似て猿も手を組秋の風

刈かぶや水田の上乃秋乃雲

秋もはや日和くるはす柿の色

弱法師今

晴もよし肥たる一つに萩芒

鬼灯を男がもてば哀なむ哉

稲かるや浪枕寄の草鞋酒

（黍の穂や割よりこぼす玉粟

虎来しにかくる子取や玉樂

洒堂

稲ひろよき海越の匂ひかな　（洒堂）
高土手に鶸の鳴日や雲ちぎれ
名月や海よりうつる蘆の中
松の葉を離して月や秋の声

洒堂珍碩

冬

誰や摺焼く在の火のふり　（あら野（俳諧問答）
佛名や菜好抓行中もありぬ
佛名や鐚泥いよみ落畑
我庵の石も名乗つて初しぐれ
出女や少ししぐれて塗木履
神送りあれける宵の土大根
神迎水口だちの馬の鈴
洗足に客と名のつて寒さかな
馬の陰おりても寒き[illegible]
世の宮ゝと侘
年忘れ歌に桃の花うへん

ガラス使用

内藤丈44（宝永元年二月廿四日歿）

のちに擔やうつれ行とし松の中

春

動物

鶯や茶の木畠の朝月夜

鶯や次第〳〵の茶の木原（　）

鶯るたとらりや庵の風呂せき

燕の戸に聞えてや鳴て入宿

鳴る兎なくてや痩すのやもめ人

河の巣の親をねらもく雉の声

たつ雉尾を羽たゝく霞かな

朝雨同じ花横のやねの花

丈艸

支考餞別
松風の声やゝ春の雞のおれ　（丈艸）

蜂の子をのこして蝶のそらちかな　（）

大原や蝶の出て舞ふ朧月

取付かぬ力に浮ふ蛙哉　（丈艸句集）

安楽寺にありて
松風をおさへてすたく蛙哉

草庵
火をともしては新よ啼あふ夜蛙

里の男の田螺売を水底に沈めて待居れハ腥を貪る鮒のいくらもあく入こみて
又捨るゝ鯲も絶ぬに田螺売

花曇り田螺のあとや水の底

春

櫻花

水壺にうつるや花の人出入

似さ松に氣ひもとりぬ花の友

洛東の花
散つゝもや花見の中のとまり鳥

咲花見るんし梅ならんちる櫻

嵐木島の枯木枯すや（を枯す）花颪し　（類題発句集　丈艸句集）

片庇は岩にかけたり花むしろ

山荒九撰集
月花やよきつかへある里の山

小田原の臣随ぬけてや花の下

夕をへや花の陰にすあふつてみ

うつくしと来ては花見の留守居哉

死だくれ留守も知らす庵の花（丈艸）

鳶の輪の崩れて入るや山桜（よつれて）（一本（[illegible]））（丈艸句集）

病中　山からい花見ん戻りや（か）枕もと（丈艸句集）

も妙に月夜烏や花の夜具

ちるうちは志賀にしておけ湖の花

角行く人をのしらか花の友

更に剣谷の鍛を侍し見して（再出）
砕けぬ先から花の埋みけり

花曇り田螺のあとや水の底　再出

塗樽の底に立よる花見かな

花ちるや耽きあいたる山岸の穴

春

植物

（櫻花除）

酒蔵の戻りは梅に習梅なり

奉納　梅さくや湯立の跡の炭の切

朱雀之のあちら二度つや梅の花

片やねの梅開きけり洞出し

庭脇は梅さく方の前の茶屋

待つことは梅なあるこのし釜拍子木

賀遅望新宅　水仙は化書は済て梅の花

庭続きを揃りて
梅の花ちりこあるや雞追風

さる翁の住居を尋て
梅うつに迷ふ庵のちまきけり

ガラス使用

引よせて放しかねたる柳かな（丈艸）

咲立て柴のならぬやつゝじ山

まだ影くも出へつゞじの白路かな

我事と鰌のにげし根芹かな

餞別　見送りの先に立けりつくづくし

あかうく（アリツラ）岩ちら下やへ翁の花（丈艸句集）

春

生物庵

・背戸中は泥通りたり田螺売

・春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴

・三月や冬ろのしまる桑一本

・三月尽人のゆくは（句集）

行春や尾も旅も里の哥

芦文

送る人、前付のしれぬ翁や命

翁の塚を謁して　京都にて

・陽炎や塚より外に住ばかり

病起坐つゝ大津にて　なる本

・木枕の垢や伊吹にのこる雪（垢（句集））

・まる寝や目やに云ん寝破り（句集）

さしみハさく青なけハ足　年具る書

まふけハもちのてさあかなもろて

・陽炎る膳の名ありさへ臥てゐる夜

太艸

閑居、新夕みせける旦過やまなかし　（大草）
・しら鷺の並んてくるなり野分
・と川のさゆく行　萩の中

夏
（里柳こ）

惟然の紙を送りて、芭蕉子歩行の独吟つくらねハいふ
四梅庵の独座、打水のこる隙や梅の中
・杉なりにせり上りたる田植かな
・松風を中に青田のそよき哉
・谷風や青田をめくる庵の窓
・夕立のかしら入たる梅かな
・夕立に走り下るや牛の蹊
・夕立にとびのく月や松の上
・つゝ立て帆みなる袖や涼み舟
・涼しさの心もとなし世をうろ
謁丈山像、さのすに扇をのこそ涼し（新つくば集）
悼元春法師、世の中を投出したる団かれ

大草

旅ハ帷子にあてすりやつ日の出ん　（丈艸）

贈新道心
松原を出て見ん涼み夜の月

・高足の高緒にはづるうちはかな（千鳥集）

東病僧人
打見るのこれ入相　柱の上

義仲の墓にて
・町中の山や五月ののぼり雲

・涼しさにまとや岩の崖かけり

・小原の山里涼し稲の上

・あら壁や打て宮をぬく夕涼

・芦わの根あけや浅みの底涼

大仏にて夜中苦熱
・涼しさや　せう動く城の松

梅本寺を立出るとて
・あけ星し納涼のあとや滴す月

高しよ先へうつり山や　やがれ公室

夏

鳥

丈草

子規なくや樽も梅樹たて

子規なくや淵水のさし満り

子規渓より上のわすれ草

子規誰にわたさん川向へ

子規たつうまの峰の早松茸

鉢を待や梅田枇杷麦郭公

月夜の松原に酔出て
狂乱の竹の中に郭公

・菜種売たつや野風の郭公

・長命寺　第の餅を鳴き出せ郭公

鳴る間よせい一そいの郭公

木曽川 流れ木や篝の上の郭公（丈艸）

しるへして山路戻せよ郭公

山道や壺荷にひゞく郭公

川越の流中に聞や郭公

嵯峨にて 荷退の庭入るや藪の郭公

粟津野や山のうら表の郭公

やう〳〵と出て啼く時の閑古鳥

仰木の里書懐 松の木の音の庄や水鶏の隣の音

訪落柿舎 飛びこんだまゝか都の郭公

夏

生物

（馬隆）

血を分けし身とは思はず蚊の憎さ（丈艸句集）

豊後 龍門寺の瀧 蛍火や杉中にこもる瀧の水

水草を出る蛍の羽音かな

蛍火や翁のあらせし庵のへり

悼曲翠亡 呼あふいたえて蛍のさかりかな

ちりつもる蛍の中や小谷の水

旭さす紙帳のうちや蚊の迷ひ

隠れ家や蚤の出て行耳の穴

梅本寺より帰まて 蝉なくや別れて上る形の山

竈のさし出してや火取虫

丈艸

ガラス使用

丈艸

水草や茂みにもとる川の浪（丈44）

去来の落柿舎にて
芽生より二葉に茂る柿の実

子のつれてうつる青葉や去年の木

昼顔や猫糸よく川向ひ

涼しさに又会せたり茶屋のこや

浦舟の浪へしに負ふ蓮ル

青ゝや馬繋やすむる晝の森

大ねの繩隙のありへや杜ふか

庵の梅の青や陰子出て文月哉

丈艸

秋

天文

名月や下雨にたりあふ風　光

あらしてもいかにいかなの月（九才の時とかや）

淀川
舟引のゑかゝとみせて月夜哉

名月や車きしらず辻番屋

荊口の行ね　らんしるを
名月の前へ廻るや旅枕

京筑紫去年の月とふ僧仲間

嵐山みこしつゝて晝から月の客

近まはた来たてつる月哉

ことを明て月のならしや廿三の上

笠の緒のあとすまうや秋の月（十七）

うら様を漏にあてけり月の雨　（丈艸）

稲妻のきれて落る山の上

夜船より上りて
両堂にて中に戯る
稲妻や松風て泊も舟心

ねかりなきせいをたしるや秋の空

伊賀へこえす時
たよき侘しく
いし取さす峠の外い秋の空

稲積に出るあらしや秋の雨

松の葉の地を立ならふ秋の雨

松風やさ雨吹く中や二つ星

秋
動物

啼たてて目さしもうとし荻の風

小[illegible]や町をうちこして荻の聲　（丈艸句集）

山をなや渡りつきたる鳥の聲

[illegible]

啄木の外まはりけり籔の松

振けともしかぬなせりや天つ雁

木啄の音ちはなをきく稽ぬきし　（小弓）

旅
きり〳〵す啼や出立の縁の下

月淋てねぬや袂のきり〳〵す

宵やみや残るこぼれたるきり〳〵す

踊り子の隣寝ぬ夜やきり〳〵す（太祇）
寝かへりの方になりもやきり〳〵す
物かけて床まてや後のきり〳〵す
つゆのちる夜へ帰くえきり〳〵す
悔かふ人のとぎれやきり〳〵す
ころれと穴にも寝るこのずきり〳〵す

病牀
虫のちるの中に咲出す萩見ん

旅中
蜻蛉の来てい眠とる笠の中
ぬけからとならんで死る秋の蝉（太祇句集）

太祇

秋
植物

早咲の得手を桜の紅葉哉
木つゝきて穴飽出る高柳
つり柳や障子にくるゝ夕の許

萩柳会
すゝれるゝ
泥柳くらのかすさよ時やき（太祇句集）
当秋の新茗書に出る葉哉

留別
百風よし出立の芋をつけけり
子猫の香や庭出さらて庵の舟（太祇句集）

ガラス使用

行秋の四五日よわる薄かな（丈艸）

芦の穂や貝掬上る夢さそう（丈艸句集）

芦の穂や髪をやといて起されん（丈艸句集）（三浦（類柑子）手前（五元））

嵯峨にて

木伐のあとは見えず菊の里

かけかけし薦の咲かぬる菊

錐頭に置て返るや秋の風

雑劇の畫をうつすやぬり枕

丈艸

秋

（天文除 生物除）

送り火の山に上るや家の数

旧里に帰りて

魂祭にもどり合せつ十年ぶり

魂祭も出て俗の世の旅居哉

精霊のすかれし人をあつめけり

魂祭の備ありきや山の上

玉棚や蘇木をともし月の影

棒の手の間どさみなる霊山ろゝ十し（ ）

居風呂の下や霊山子の手の絵

答へに鳴子の綱や窓の中

下りくる魚のすゝかハ崩れ簗

あれこれを笑ひもつける花薄かな（丈艸）

旅瘦そる人にハむしらぬ秋の暮

遊五老井
青天やよさしもならず秋の暮

訪御里舊友
病人と鉢木に居る夜寒かな

苔見窓山庵
焼栗も名もなしいつく夜寒かな

なすびの手に居つかぬ夜寒かな

夜咄の長さをれむどころの山

須广
旅あふ秋のあてとや寺と船

幾夕へ秋の廻るや原の庵

陶衛も秋ハことさら山の霧

り秋や梢にうつる鶺鴒

翁が庵にて側居せんとす
比枝おろししくれの雲や床々替也（小等）

冬

時雨
霰
風
冬月

風雲やしくれをくゞる比良おろし

鶏もたかくる日和やむらしくれ

鳥の羽もさハらで雲のしくれ口

月代やしくれの中の出の夕

雪雲る松ハ枯葉の印しくれ（丈艸句集）

一方ハ蘇のしは作ふしくれけり

黒みけり沖のしくれの行處

幾人かしくれかけぬく勢田の橋

屋根ふきの海をねぢむくしくれ哉（丈艸句集）

両山のしくれつきあふ庵の上

丈艸

谷川の小石に筆し経の要文を写して先師翁の菩提を祈る
石経の墨を添へけり初しぐれ（丈艸）

所思
ほれたる樫も終に砕しぐれ

東湖あたりの冬せいと吟じて
一むきちらしてみやしぐれ夜の借着物

越中翁塚手向
入月やしぐるゝ雲の底光り

淋しさの底ぬけてふるみぞれかな（今日の昔）

あらはる岩の霰や雪の中

芭蕉翁を夢に感じてつくりたる玄梅の畫に
凩の身ハ野轉し夢の中

凩のあたり處のこぶ柳

あら猪のかけ出る形や冬の月

雪よりしろし古塔冬の月

冬之

雪
霙
霜

雪花や片隅淋し牛の宿る（丈艸句集）

猫寒く閨の書前や雪日和

しゆきくる雲の黒さや雲の間

野も山も雪にとられて何もなし

村雲の岩を出るや雪吹の根

嵯峨の野明別荘にて
柴の戸や夜の間に我を雪の客

あれあふて申れなや雪のな

杉の人に申しける
山寺の降りをやんで京の雪

狼の声そろふなり雪のくれ

納豆するときれや鴻雪起し

丈艸

去来の庵を訪ひ来侍る
にをりしも

雪くもり身の上をなく烏かな　（丈艸）

谷は未の雪見や比枝のおろし

きのふやみりつむ峯の雪のやと

ふりかへて山からんし　雪の空

墨染は雪に出家なりふ

雨炭の色やたどらぬみは雪の墨

長崎卯七家島
撰集の時
山中泊

句撰や雲ふる宿のあかれ酒

雪ふる宿のしまりや紙衾着

淋しさの底ぬけてふるみぞれかな

翁忌中

新霜や茶湯の湯の茶鶏

初霜の[illegible]

~~[illegible]~~

冬

動物

器物

悼芭蕉翁

背戸口の入江に上る千鳥かな

曉の墓もゆるぐや千鳥数寄

寒復の屋根あく鴨のむれ

翁病中祈清

舟こす鴨のささりや請坊主へ（丈艸句集）

水底を見て来た貌の小鴨かな

鷹の目の枯野にすわる嵐かな

枯鳥をとやし立り鴨のむれ

小夜千鳥庚申待の舟屋かな

着て立てば（ちハつ句集）夜の衾もなかりけり

[illegible]やなる朱他の穴や二三土産

丈艸

下京をめぐりて火燵行脚かな（丈44）
守り居る巨燵を庵の本尊かな
炭きれや隣の人の其をかりく
~~巨燵に猫も紙衣もやけにけり~~
水風呂に貸しかけて客の集
新清河の横になりたる巨燵かな
吹荒てやせハ山や思ふ月嵯峨の
庵室もあり十をとりを討誦して
山やふる蚊帳の中の置火燵
ほこ〳〵と旭さしこむ巨燵かな
榾の火や下焼うらの五六尺
草庵の巨燵の下や古狸

丈4

冬

（天文除）
（動物、器物除）

はせを翁七回忌
待うけて経書く風の落葉かな
水鳥の岩に寄付く木葉かな
舟待の笠にはあたる霰かな
穂るゝの風の枝葉にすわる嵐かな　再出
はせを翁追悼
ゆりすわる小春の海や墳の前
神杉のさゝえこえし[illegible]
寒ハ臥ゆめより[illegible]
十五日来やたのしむ年のくれ
追るゝ山へ帰るゝ年のくれ
看病して
うづくまる薬鑵の下の寒さかな（丈艸句集）
寒き夜やひつくれて山の上（丈44）

火燵をけせば嵐の筆恵れ（太祇）

鐘の下あしつゝや冬籠り

狂法師の中に
四畳ノ見そ

焼さきや山風うけて過し

うら門の出入くや鉢叩

舟岡に来ぬわらすや鉢叩

一月ハ我に米かせ鉢叩

都のさきは珠数ならす網代守（太祇句選）

一夜さに縮し紙衣やけとくれ

紙衣きてすれバ巨燵のてらゝ崇

貧交

交りハ紙衣の切を譲りけり

去來全集（宝永二（元カ）年九月十日歿）

春

動物

鶯や内のもなけれどまそふくる

流出しひけと雉のほろゝ

鶯の啼や餌ひろふ片手にも

おちてしいもしらぬや来帰

物ゝとて集まる一夜海のちらし

蔵すてり骨折る岸の蛙哉

浮出して来そふことはや猫の恋

鶯の声つかれたちからめ二声

鶯のちゝくしてこたに来居

鶯の船やまつさあや鶯の法

（去来）

ひばりや雀よけけり枝うつり

ひばりの声帰かへりの子に出そ

れ柳の東の方を
きんとみる先ふた　ひばりこの人のおもたるか挽の傍

うきなまかれし雉の出いなる

けちや二足あんつむ雉の声

田の畦や虹を背負てなく雉

一畑いゝ帰やむ雉子なれ

山雀の入ねすなるしおれ

雉のおやしかるらん雉の雛

春

櫻花

去来

花ゑ眼ありけり志賀の浦

小袖着て花なれるりや出女花

花もりや白きかしらをつき合せ

立枝の結り多さや花の中

賽銭も用意顔也（春の花 花の春）

よしの山よちる方よ花めくり

知る人にあはじ〳〵と花見かな

おもしいあの山こえん花の色

花もりも夢さめぬ里のたその夕

花ちるとちらぬすむ樵のあ（間）みの山

何事ぞ花みる人の長刀　（去来）

般若寺
ちりこもる花や般若の鐘の声

田上のさとへ花見に招れて
あをさくる目つきも出す花の雲

花さかり日数るまゝす衣から

雪舟の絵をかりて
嵯峨の旅を題す
供養されまこえよれ初桜

さく花に浮世の人や御せり

駒桜小の淵や夕桜

山深く分入りて
木の下の天狗もていふ花の友

青柳やおのい重なる糸桜

春
植物
（櫻花除）

上臈の山荘に
侍りて
やせはてゝ香にさく梅の思ひ哉

梅か香や山路猟入犬のまね

鶯や梅あまりくれて梅の花

憩くて人をすゞせる柳かな

青柳のたゝいて遊ふ枝えゝかな

姑の気に入る人は柳かな

五六本よりてしたるゝ柳かな

青柳やおのいかさなる糸桜　重出

一もしろちるや日ころの赤椿

ま一ていゆすのうるまやつじ山

去来

花茅つゝまばつゝまん俵　（去来）

簑虫のさがりはじめつ萩の花　さし（北の山）

春
時令
人倫

人間の始りけりや寅の月　さし（大三物）

あら玉の雨ゝ次きよすれ秋の月　さし、、

えりや土つけふたる薪せん

えりや家を譲りの太刀はすゝん

嵯峨にて
ある家に

ケナリ
藪形ではあかしふて花の春

妻や祝ふ丹波の蕪も物るとて

獨りすむよき宿とらん初子の日

商人の気さくゆかし伊勢の春

長崎之春、幼に浦を出
里の悦を逐へて我を祝ふ事

うづみすれ子あそぶて旅も花の春　ナナし（小弓）

去来

神鳴や一むらこえの浮ほとり　（去来）

三月とみよ書くのゝ名残かな（去来）

悼丈艸
なき名きく春や三年の生わかれ

挊仰こゑ夜もたれハ朧し

糸宮の杉
本御の心を
み風の強生ハ深し門の柳

万歳や左右にひらいて松の陰

春

（生物除）
（時令人倫除）

春風に吹き出されなり水の胡蘆

なすみせよ闇のあけくの朧月

送別
手を放つ中に落けり朧月

朧月一足つゝもわかれかな

呂丸追悼
ふえきやす雪は名残やのへの供

翁のこゝろりのむかしゐる年の春義仲寺に詣て
石塔もはや苔つくや春の雨

陽炎や足もとにつく戻り駕籠

上り帆の淡路はなれぬ汐干かな

去来

去来

月雪の為にもしたし門の松　（去来）
蓬莱にうけてうきる春の袖
振舞や下座に直る去年の雛
蕗の根やあけてゆり出す茶摘歌
百姓も麦にとりつく茶摘歌
動くとも見えで畑打つ男かな

春

夏

時候
地理
食物

たまたまに三日月拝む五月かな　（北の山）
水無月の筍うれし竹生嶋
（廿年イ）朝顔の二葉にうくる暑さかな
蔓うらをこけ出て瓜の暑さかな
石も木も眼にひかる暑さかな
義農の園　葛うけて比叡も見えぬ暑さかな
義農の園熊阪人見の松　わる暑く吹くや人見の松の風
涼しさ[illegible]山にうつる念佛かな　（去来）

去来

ガラス使用

凉しさや浮洲の上のざこくらべ

凉しさよ夕立ながら入日影

洒堂か雛所に居を移せし時
間数も夢自由なり夏肴

谷汲寺にて
順禮もしやみや襟に蟬の殻

六玉川高野の外は清水かな

（去来）

去来

夏

天文
人事
器用

馬の子のかけ遠ざかり夏の月　十二（北の山）

夕暮に元ならびたる雲の峯

暮待や藪のひうへの雲の峯

湖の水まさりけり五月雨

料足つゝみなる紙の下に
つくりもをてなし隣や五月雨

さとりの繪を見て
五月雨に沈むや紀伊の八庄司

伏見の舟中より
夕立のこせしもからず留守の宮

蔵のうちをながめて
鎧きてつかれためさん土用干

町すぢは祭に似たり夕涼し

ガラス使用

重家の手跡をみて
春代やてもしき門に立涼し
更る夜を隣にならふ涼み哉
夕涼み疝気起して帰りけり
立ありく人にまきれて涼み哉
猫の子の巾着なふる涼み哉

（去来）

青柴を焼化しつるや小原大原

中庸の母の悼
蚊屋をいなさて寝いたく悔哉
旅寝してよいわらき菊の枕哉

夏
動物

よのたて追れうものゝ時鳥
うかれ出て山のへするか時鳥
心なき代官殿や時鳥
若るしやさし刀や時鳥
鳴く行の夜ハ啼いふけ時鳥

西山へまいりて
我身にきくや内野の時鳥

熊野にありしかと
いふ歌ありし御書の事て
こちの方もありしかにや時鳥
兄弟の顔見合すや時鳥
横雲のうちや山出の時鳥
時鳥きのふ一声けふ二声

去来

ガラス使用

時鳥なくや雲雀と十文字　（去来）

夜ハしら〳〵明の水鶏啼

水札なくや魚浪しける岩の上

兄弟のなにをくれる歩行粽

石垣に粉くひ入や淵の鮎

住かへよ人見の松の蝉の声

螢火や吹きとばされて鳰の闇

舟を下して
螢火や黒津の橋見この端

悼妹
手のうへに悲しく消る螢かな

山里の蚊ハ晝中に食ひ分

夏

植物

武士の子の生長を祝て
笋の時よりしるし弓の竹

笋の力を誰にたとふへき（十こ）凡兆（猿蓑）

百姓ハ麦にとりつく茶摘唄（或ハ春）

順礼の時
笈摺に卯の花寒し初瀬山
（卯の花に笈摺）

逢従兄弟
其名へ一つ畑の瓜茄子

夕顔の名を恥したる簀の縁

[illegible]この[illegible]傷きや杜若

卯の花の絶間たゝかん闇の門

笋や畠隣よ悪太郎

光りあふ二つの山の茂りかな

去來

ガラス使用

祭再興

酔顔に葵こぼるゝ匂ひかな　（去来）

ふる里の一流やされけりの花

卯の花は海のかさりや熊野山

熊野路に知る人もちぬ桐の花

いろ〳〵の作ありけり麦の花と

つゝきあふ子供のたけや麦畑　（去来発句集）

秋月

~~馬の上のかけ迄より宴の月~~　（北の山）

のりながら株をまはせて月見かな

盲より唖のかはゆき月見かな

思ひ寄子てつゝむ旅の月見かな

月見せん伏見の城の捨郭

中秋喪猶子
かゝる夜の月も見にけり野辺送

其角よりよせて乙州より香事携
鴨川や[illegible]月見の袖にあまり

名月や向ひの柳尾てらる

もろこしより申よせ扶桑掃対
名月やたゞの子せうる旅へ

名月や掾より出す香の中

名月や海もおもはず山も見ず

去来

十五夜の月のひらきやお[illegible]
岩鼻やこゝにもひとり月の客
嵐山を花とこえそ後の月見かな
目にかゝる山や思ひし月の雲
猪の寝に行く方や昼の月
これくしも東向くらん月の暮　（去来）

長崎諏訪社　なつかしさ京にて語る諏訪の月

嵯峨子催し　月のこゝろ我異人の夢きかん

長崎去行亭　留人をまかせて[illegible]あへる月夜かな

国木の相手少年の まつり明ふる手て　月うけて稲を結ぶやうの秋

十六夜やたゞのよくしての色

去来

秋天文

（月座）

一　家前て（桜 風）こそ去ゆき本陣ゟ
稲妻や猪の臥芝の起上り
悼風国　秋の夕かくらふものを神の森
悼嵐蘭　千歳のつき埋りけり荻の露
（頭の婦なり かくに）　めれくの手つ縫やつまりて袖の露
すたくの路のかゝらや天の川
吉備津宮奉納　秋風や鬼とりひしく吉備の山
白川や尾花に石なく竹の風
秋風もしんまもる入るのうみ
秋風に耳の塵とれ涼しける

ガラス使用

遊女常盤にあそびけり
名を惜みおもひ侍る
[illegible]悩此世の月見るみけれ　（去来）

秋風や白木の[illegible]に弦はらん

樫の木の色もあるや秋の空

野ゝ露やところのまろきつれん

馬のはしくされ谷の露深し

聖護院
稲妻のかきませて行闇夜かな

長崎丸山
稲つまやどの傾城とかり枕

有磯海撰集の時
鷲の子や野分にふとる有磯海

秋

動物

奥山や五寸つゝく鹿なく（の声イ）

小男鹿や岩に踏ぬるをのすゝき

臥寄るや小萩にもれて鹿の角

秋風やむりに吹きよる[illegible]（鹿）の声

啼鹿を椎の木の間に見付けり

いろつき時
ゑつゞはの岸ほにゑゞつゐ鹿の声

雁金のや年になる的猿佛し

長崎の猿楽氏
故さとも今はかり寝や渡り鳥

海鴎や国々も交る渡り鳥

[illegible]沢の上をわたりける

去来

、虎の尾をひき
とゞめられて
子はあすになるそ[illegible]の渡り鳥　（去来）

紀前書に
名月や[illegible]灘女や鮑つり

[illegible]草さへやまくらにおちず虫の声

一列にかりくれの虫はつれてる

秋

植物

手打したうから[illegible]西瓜かな　（[illegible]）

けふきたほつと抱付西瓜かな

風撰で馬とぶばする花薄

年老て神祭楽
祈る人々
花は実に晩稲は多し神の森

[illegible]
芒の穂手に着くわかや森の径

[illegible]
男のかもしやまつるなよ　花薄

[illegible]柳見
柳の下や植ゑ置きし花　山

月暗干やへ人見えても出の紙

彼の柳の下にて
こゝろのまゝ
[illegible]
萩柳かのもと
ともかくて
やそちる柳の若葉も[illegible]の[illegible]

息才の数まさりはん[illegible]の松

若葉咲て[illegible]根のうへかりや　山白田

去来

200

れよりハ蝶ふらん　花落
芋洗ふ人より先ず悦らん
草来や桜ハ蘆の膳気和
花お　稲妻や千顔あつまる上下路
松茸や人にとらるゝ鼻の先
義仲寺にまうでゝ先師の
のもとにかくれ給ひける所
秋いまだ月もしらぬ墓のうへ
菊の香もすれて枕も蔵
旅　柳島感坊
柳男も之いとめる所の芸
周防にて
木のもとに魚生ゆる木の下さく
梅山の落葉をめぐりて綿しく
芳記　雨松花を一つの箇粟の峯とし
甲陽軍鑑
あらゆる事の後悔の誠はまゝならぬ

（去来）

秋

天文除
生物除

去來

花落　蝉をまけてゆかしの舟踊
汐明亭　折つゝ星まつ祝や湯の宿
山本や鳥かくる星の鳴
照ならぶはやかの秋の鶏
玉棚の奥なつかしや親の顔
一日はなしも
物見侍りけるに
一日も孫子となりて墓参
東なりける墓のかなしくや魂祭
人のもとにて
秋風住まりたり百拝
踊子よあすハ畠の草ぬかん
湯あとなくして湯の毛竿
病人の枕元
花のうちの人に
よしへとまれ秋ハこゝの枕

宰府奉納
幾秋の白毛も神の光かな　（去来）

もき枝も旅くるしける捨れかな　（千子　伊勢紀行）

秋の日の明りあなたゞしぐれかな　（去来発句集）

あらの南
八月は湖のさいきも山かつら

一声や衣も破て鈴虫へ

[illegible]栗の木の出しん宵の月

娘より妹の苦弱きあはしかな

高楼の眠りをさます砧かな

畏
秋の夜は陣ならぶ旅のやとりかな

関中川とひめかくしの備刀

筆たくくしきたまろ紙かな

うき人をみれは説さん秋のくれ

冬
時雨

去来

さゝの綱かいつくろひぬ初しくれ

いろいろに千帆にみせて一しくれ

いそかしや沖の時雨の真帆片帆

ひとりさし先へ[illegible]しくれけり

一しくれしくれて行や近江路

牛見て伯父と名のるしくれかな

風の地にて散りぬしくれかな

しくるゝや紅の小袖を吹かへし

尻ふらすあふ村のしくれかな

ちりしけの烏帽子の上や初しくれ

柳なと祝ひてきかしらん（六五）　（去来）
山雀の里かせきするしくれ哉
塗桴の夜ちよねくしくれ哉
翁三回忌
曽うつゝ之分は袖のしくれ哉

冬
天文
（時雨除）

松本にて　初雪や四五里へたてゝ比良の嶽
應ゝといへと叩くや雪の門
ひつかけて行くや吹雪の豊嶋ござ（てしまござ）
読軍書　雪みれハ常盤絶おの最をしき
悼浪化君　其晩やせしに花ある雅への雪
雪の山かりつゝは猶しるしてありける
詠めやる通のとちやりの雪
曙は鳥部　雪隠す絶花町
絵の中に居る山家の雪けしき（ゐてうるきゑの山路かれ）
あめまさて雪のつもるや小町の跡

去来

九重に見なれぬ雪の庭さくら

こがらしや鬼も腕を出すべう

旅人の外は通らず[illegible]

題石房没山集　凩や鉋を（ふる）ひろふとなみ山

翁病中祈祷　凩の空見直すや鶴の声

松杉すくひよする霙かな

志賀寺と打やきれん玉霰

大年一日　鍛冶屋や人参つんで[illegible]

訪大年　こゝろや暮をたのしむ宿の中

（去来）

冬

生物

人事

去来

[illegible]人はなしの猪も鯨の猪

あら浪やはまり訓たる宿衛

冬枯の木の間（沢の）のねんなるなよかな

賽銭を落して拂ふ菰筵

鴨なくや弓矢をすてゝ十（餘五）年

夕照子ゆらつく猿の枯葉かな

尾頭のこゝろもとなき海鼠かな

神尾もきはまる年の市の中

奉納八幡　はなすきをいさよや冬花

舟に居て鳥のあいやぞ花

（去来）

（去来）

髪剃のあとうすき冬籠

墨染の眉の毛長し冬籠

霜月や日まぜにしけて冬籠

卯七亭

山畑や青み残して冬構

布子着て拂き新や神送

傀儡師絵賛

わすれ得ぬ空も十夜の涙哉

先来のれもと見し御佛名

御神楽や火を焼き手あふらん

日くりよなりけり寒念佛

冬
時節
器用
人倫

木曽塚に参りて

如馬にまたし渡るや神な月

年の夜の鰤や鰯や三の膳

くれて行年のまうけや伊勢暦

節季候の一重は何のとしの暮

堀川を過て

有明たのもしき錐きこえし（[illegible]）

年の夜や人に手足の十ばかり

300

いく心な事の語や風の紙

李下の妻みまかりけるに

寝られずやかたへひえゆく北颪

悼丈草

ときを鳥やとひつる山の上

長崎に旅寝して

年浪のくゞりて行や足の下

去来

ガラス使用

雑

大宰府奉納
梅ゝ臥の心臥や神の光かな
（梅ゝ
（毛ゝ

年もはや牛の尾踏のたかまくら（去来）
火ゝ生背れニ寄し竈のお
廣沢
池の面をのわるやあさてやま
ゑちごき新當見せよ卯
笋こそまねし乙せん誰殺
十種をなしてたる友の霧をまよひ
旅人の池まで行し許卯
椿の火に親子見せんわび様
出夜半やころく際し月の訳
香痛し人おのころうれ
草落の一の宝や青しくら
京の人半に番過ケリ年の暮十七（大三物）

315

（去来）

猿雖（宝永元十一月歿）

春

ねぶだに臥てもれし西行は
白魚のあへかゝるすみ屋の浦
見に立てゝ月よし梅の花
訪たいつくりさせるせかい
はるのの凡にちらしてそ菜の角
ゑるめは焼米の煙で八の末
杉川や湯かゝれ木仙の芽

去来抄に（あるか）

出かせて雛わすれは桜の花
早やうゐ田中の道を小田

猿雖
川隈の泡をとやすむ舟の角

蛙子のつらをこゝすや烏芋也（猿蓑）

高山を出て
大年始を
見かけて
春なるや山より出るこゝの門

そら向きさけなりの梅の花

燕は土で家する木曽路かな

汲るやはてさきしより花の塚

山桜世にはつらうしき桜木ん

波先や瀬田の水ひく朧月

夏

猿雖

かるき身の捨る子もなし親もなし

蛍の一つきそもな宵のくもりど

手らせていはわすれるゝ扇（すき一本哉）

あつき夜をそろしなる戸の画かれ

寺の音のあとはしとなき世の夢ん

先こゝの路しのしい法水うれ

箕る木やこちらすませい降る夜の鼓

うしろ向きお向くや木や笑子ら

再昔た月の掛けや水の下

瓦山の力及ぬあつさかな

照よけて夕立雲の崩れかゝり
悲しきと生れ付たる蛍哉　（猿雖）

秋

猿雖

はなしは雲の見もなしそばの花
秋はやまちるの松の雨やすゝ
あれ〳〵て末は海行野分かな
あさくは里出来なし子下る
うき蛍のまつりになき人恋し
まきの葉の露くへば晴のきちるむく
千るしの杉や刈干しに陽の暮
七夕やいたんる事哉　秋の道

猿雖

冬

節季ハ我も逃とひくる子ら
蓑虫の宿のおき にはれける
楠の枝の二つ あらはし里の暮
雪の日や うすやくするうち 細
年の夜ハ豆もしらず 俵かな

惟然
稚きものそてや 本葉の噂ともすり
昔ん布の湯気 あるかにいくれハ
初雪や 紙帳揉出す 若菜草
風の夜 天蚕や 世事の わる一つ

猿雖

北村季吟（寶永二年六月十五日歿）

宇鑑旧路

春

たねなりそしや先御代をこそ千代の春
すき（酔）もの（好士）ハさく（咲）（作）をあやかれ梅の花
東山いすもやたぞこ花の氏
山の景や一児桜にほの海　季吟（埋木）貞室（糸まき）
ゑゝろの和哥三神や月日星
神歩や申楽ぞ祝ふ君ハ千代
地主からハ木のまの花の都かな
日の本やたゝしとやすた義も
猿ハさぞ撰書清水の花の春
一僕とほ〳〵ありく花見かな

ガラス使用

若子を祝ひて
猶にけさ生るゝ見しの門の松（季吟）
堪節をまつや笑ふ糸桜
獣は吠る声なりねりん像
えるとうらえ日まその本春秋
伊勢海老や祝ひたしるしうゆすり　圏

卒都婆小町の絵
花の色はうつりし夢かたれのきて
筆の花しほのへ明や初櫻

夏

放時鳥
鳥の死のうき目見つらん時鳥
耳かふれな宿にあやめをふき自由

忍恋
夏痩のとこにへて有とは泪かれ

て、折りは
よ折りは手折りけんなれや美人草　長重（毛吹草）
季吟（類題発句集）

季吟

ガラス使用

（季吟）

秋

月の顔に大の字するや厂の文字

女郎花たとへばあはの内侍也

まさしくといますが如し魂祭

りきあるやんの駒のかけ踊

哀傷

はかなさをせいまあしくと露しくれ

秋風の口まねするや萩の聲　望一（毛吹草）

季吟（類題発句集）

名月　あみりれい

あたにこふやない鮑くりふもち月夜

鈴虫巻

横笛にならぶ鈴虫の夜聲かな

父の忌日にて

みおもしとはおもがみの曲の聲

季吟　望月なし　自の名月　十三夜

月を拝あや遁ゑみこそんに二夜まつらず

ガラス使用

軍場や嵐に追ふつ真葛原

冬

（信章に江戸へ下りたり）や見せじ富士を見た目に比枝の雪

（年内立春）年の内へふみこむ春の日あし哉

ガラス使用

江東堅田

遍照寺李由（宝永二年六月廿日（廿三日）歿）

春（天文、植物など）

宝引に枝を拝ぬ顔の紙われ

黒きもの一つハ鳧や雁の列

大福や爐の新茶の名残して

茶の花をもうちにつけて鳴く雉

川またに鳴くや千鳥の走りね

水尾谷のしつらしくれて鳴く蛙

出代や猫が先へ訓されける

やぶ入や親なき里の春の雨

大峯や桜の奥の雉子聲

五百弟子にたち混りても一季者

（李由）

李由

ガラス使用

永き日や大佛殿の普請所
松や病氣をとまるか御代の春　（李由）

春

天文
植物

陽炎やあとの淋しき小大名
下萠のけしきをけすや春の雪

近道を教へ力や古柳
結ふての髪を揺たる柳かな

寺町や向ひ合せの梅の花
寺の名は忘れて梅の花盛

雑事のつゞきに遊ふ花見かな

李由

食おをしひるゝ花後の主かな　（李由）

金の間の庭一もとや八重桜

駕籠にのりて
天井に首ハつかへて山桜

太神宮奉納
松桜川をへたてゝ墨の袖

獨活の香に亭主のすゝむ出立かな

李由

夏

筍やくひ残されし垣の家

待許六
筍の掃や人をまつ日數

いつの時人ゟ先ちらん白牡丹

おたふれをやして町の夕涼

夕立やひしくとやむるの声

[illegible]

蓮るの葉味ハ淡る七也かな

筍の皮ふみこそしれ（別）桃の花

水引て蚊帳ゆふ坪や夏衣

時なる鴨川の水山法師

画賛
吼獅子の血を干つる牡丹かな

ガラス使用

送諸は猶のみもはえ振舞衣　（李由）

我も我もあふ鵜つかひや川の水

苗塚を作る家や下る雀

それの時石臼をひく備かな

陰の夏の中にいきるふ大路かな

田仕舞の中にし流き早苗かな

笋しいうけてかそし　時ゐる

秋

菜畠の一うねいや秋の雨

焼さしの人香の匂ひや秋の風

夜食の湯の汗に出る踊かな

總法参詣
下草のあかりに踊る子供かな

秋の蝉を拾てはうりし夜かな

蛤のふたりえぬれ稲すゝめ

生姜市納を来まふ祭てかな

万年のむすひ合すや出水田

日陰の日にそよめや栗の虫

手かりよそれの家にての秋の宿

踊るへき程みは鎮まそ今宵の月

李由

（李由）

明月は蕎麦乃花まて見ゆるなり

稲むしろ近江の国の廣さかな

菜大根よ二百十日のあとならば

たり穂をとらえて出るすゝの月

やねまつる墨谷の中空乃秋

亡母年還悼

同年の尾ゝつきに作て袖地かな

新禮して花絶しより菊作り

寄宿山寺

むしくれや泪の筆の[illegible]ぬめり

過去老井

綵傘の笑み[illegible]悔の心

菊の根の切あとにむつふくるかな

[illegible]かゝるたゝらぬ後の紅葡萄の花

冬

初雪や麦の四寸のこゝろあれ

乞食のるゝけふは探る夜の宿

[illegible]きぬ解人もありの[illegible]

水くみの暮あてゝするか[illegible]

小家なかまに金周[illegible]巨燵

水鳥を喰きつさけり[illegible]

煤掃やおとりくゞる菊株

こゝかすを引つる松の木かな

あときゝこと味噌の分綿かな

[illegible]や比良より小[illegible]かき

麦まきの声[illegible]

深山に空華秋のたゝし岸　（李由）

悼馬仏
千鶴もされ存子共の離れ際

此方精もるて涙春の前栽

まま稲のつゝよりや大松し

都の外や一雨ふる秋田の稲

云ふ田や空を焼かよの花曇

肩見ゆの曲乱りくす紙衣に

大仏して階下一つみとれり

此傷知にすゝんで見ゆる細氏ら

悼蕉翁
帰らうちの狂筆をきまぬ世空千鳥

日枝までもの月おしよりの舟

尼智月（宝永三年歿）

春

白雪の若菜にやして消えにけり

義仲塚
雪清てあかり作り出し杉の塚

春山のまゝしらぬ花曇

七草の拍子囃子あはせけり

逢坂や花の梢の車うし　こち

山つゝじ海に見よとや夕日影

山桜ちるや小川の水車

これてこそ歳をしられ桜花

鶯たゝぬまもしやすあん流もと

月をよそにうかれぬ猫の恋

智月

年内立春

みなもとの節や梅の花

酒池蛙までのミることし

花さくや五尺に足らぬ木なれど

世のうさや晩に出てよひ星

妻こひハ人や咎めん寺の猫

（智月）

夏

有と無と二本まじりけり芥子の花

唐花にゆきかゝる雨く牡丹かな

雲の峰の星見て居るに時鳥

晝顔や雨ふり足らぬ花の顔

清風ハすくれて涼し五位の声

晝まではさよみりそぞ咲る

手枕や月ハ布目の隙の内

乗引て老をかませよ夕涼

筍やはつきつけ甲武者

蓬咲やいとしいせき合子障の櫛

智月

ガラス使用

須爪にねちあふ芥子の花かな　（智月）

只有明の月を詠ける
と吟しられける一聲かなたにくき人こそ時鳥

謡を案じて
蓑わらの雫してやまん雨蛙

真恩上人におくりて
衣をつきりと衣たちかん衣かへ

秋

智月

悼嵐蘭

稲の花これを佛の土産かな

鳴き出して来こそゆく稲雀

象にねる佛の中の佛かな

あぢきなはずぶ花ぢからもの罪雀

年よれば髪もの毛そきりへ

むらしと向へば月の光りかな

二つあるはいはすかひやちるめの月

名月や志賀の磯田の稲の実色

ちりかゝ稲の初穂のあき穂稲

秋ひとりさびしらせある鹿の聲

ガラス使用

智月

七度の花のはしめや早稲の花

冬

智月

御火焼の盆物とるな村鴉

待春や氷にまじるちり芥

昔しそれは鏡へず年の暮

なしよせて鶯一羽年の暮

送乙州

是とときつゝみゆく旅や富士の雪

見やるさへ旅人寒し石部山

降雪に猪大きうなるしの山

風や色にも見えんあられせん

我なりの衣みえゆる枯野哉

酒もりの一重にうし年忘

三井の鐘聞てはるけや冬の空　（智月）

月日さもこゝろ斗りに枕かな

年くれは子は姉様や冬せな

水仙の花のうるまは真に

嵐雪

正月始のあるとはきとひを
人とする気り人作りて

春

時令
天文
飲食

服部嵐雪（宝永四年十月十三日歿）

元日はれて雀のもの語り

三ッの朝三よくれを見ゆやまん

（五引（玄峰）
年立ちて遠近の風同じな

四十すて四谷をうらん花の春

れりまト
正月ハ芋になりて雑煮かな（風（玄峰）

二月や巨燵の縁を枕とて

ゑ餘寒の無縁也ちにあら相霜ム

めん／＼の嫁をけらつや花の春（ふつ玄峰集）

初せ[illegible]や鶴をのせる牛の鞍

よろこ[illegible]春をとろんよ行初子の玉箒

中川やほうり込たる朧月・（嵐雪）

鶯の声をあはれん草の餅・

梅の香や給仕は舞人に実の宿・

~~作りかや仙洞の梅柳かな~~

青精飯　相柳民くまやうよ廿年飯し・

神人の隣まと借りし門の春・

四海波魚のきく耳あけの春・

元日やうく勤くれゆ・

新玉のゑるも阿房（アホリ）をそむまい・

（晦日ラの上あさみせしを人の）
（来て起せしに叱くすかれぬ）
椎茂と起しに来たる言かな・

（先の門人何かしか旅立けるた）
（煩ひを絶えてかくするもとこ）
まれの礼を引切られけり・

春

器物

人事

地理

小乱　惜花（少年）
木の梢にしばしかゝるや風・

蛸足傍覧之
ころに年きき
糸つくる人とあそぶや風・

先ず氣端福ちあ風・

楪の世何隣家や書かゝら風・

送お
鳥辺を引とめけり風・

羽子板やたゞ花めでさき重衣・

節分
はつゝと噂積あす左けり

石女の雛かしつくえあはれなる

嬉し
雛見舞てかなしけり

夫（夫）いとやす女（妻）ハ若菜摘殺・

嵐雪

憶翁之客中

旅ねして芋をつゝしらん草枕（嵐雪）

泊ちくれて餞の旅引衣繕ひ

出代やをさなこゝろにものあはれ

若水に鏡見の鏡を磨く（山やノ字（言降））

須ゝの石見の舟や寒舟

夏の夜はのり舟や泊衞ち

我弟今ゟ同化言教
歡喜踊躍を法悦なりて

姥ゞしての念佛ぞきゝの柄杓かな

出代や一門に継衣の布

春

動物

鶯や書院の白ニ下ちる

鶯にかゝと息する（山鶯かな（言降））

川ミれはおすゞり小鴨かな

笠屋に入て旅人なくなる燕かな

柳よりふるておのれ蔵の夕燕

偽くさき人はくふたる胡蝶かな

よそより帰り
侍りて

よりなしや鰈の苗とゆく蛙

春の水に牲の赤草を柳鮎

草の芽と見えて小鷦鷯

去月二十七日
嵐雪

鶯やこゝまでとゞけて法の声

女ノ代え　なれも恋猫に伽羅焼てうかれけり．（嵐雪）

一ト月の（塩（言峰））夢まであかん中郡維．

みをゝとなすからせいせい　村十隹．

几董根え　佛に入　発句どもつゞる　勢あり．

あの花もむかしきゝの事とや此　この梅を忘れた月の見えぬ．
門おもり　（日の身を住の作し）

春

（梅）
（櫻）

梅嵐宅　梅さらそみ一白い雪の梅（猿蓑ニ不出関白）

梅一りん〳〵ほどのあたゝかさ．

花はよし毛虫をたまりたる桜

夜さるは硯やはしき児桜

あやおそ色川よりなる花の山

御中方尼前は花の見番か

花の風様くまそでみけ酒の色

大江山縁　なまくさき風吹すし山桜

小町櫻　歌恋よ月は鳥毛もなきか花の色

華好は遊識りけり　花鬼

嵐雪

目出度の師を東中や花の兄　（嵐雪）

キ角中陰四句

普化去りぬ匂ひ残りて花の跡や

新まきの花おちるや山おろし

咲は桜ツ（メカシ）あふ縁なる桜哉

花の其比を渚やまで見るな

逍遥鵬鷃之間
出入是非之境
　附于

梅さむる終日見るや宰相殿

輪に結ぶ梅やあけたる月夜かな

臥龍梅

白雲の跡をつゝむや梅の花

荏柄天神奉納

こぼれ梅かゝりけるさよの洞ゝし

以下一字題

月のゆふの背中さと梅の木ふりし

梅ちるやもののない家に恥かしき

梅干しやそしつて居る折梅の香

嵐雪

春

植物

（梅櫻柳）

春朝

ぬれ梅や暮落て土なるか

月の夜は枝つくし路や柳原（ナレツ言牲）

甘藪あたりて立置ん郭すさき

薮の菴は掛けて人の詠ふ

ひもふりもの花紅葉より梅ほこり（折花（言律））

猿の鳴き音ゝ月を採り

梅咲の花せんとて藪かな

甘わりなきややや一葉の梅の化粧

百代に春の力や風たすき

小坊主よ見なそたんぽぽの花

ゐつゝじ折くやるぞ角樽　（嵐雪）

菜の花や九日のえより入　嵐青（類題発句集）

其角　墓参
山吹の実を宗匠の樹一ツ

其角菜七つぶを判する句
七草を三へんうつて寝首かな

霰ハ昔に雪ハ来する若菜かな

風除て居るすゞね暮かな

中興で存方
乱るへきんべの柳をさすの神子

夏

天文
地理
時候

五月雨や硯箱なる虎の子

時鳥の三句まで あまおとこんなれハ
五月雨の端て仕たき一軒家もうけり

五月雨や垣切の通す鷺の庵

夕立や障子離るゝ片ひさし

青嵐室する方や苗のいろ

青嵐吹くや烟草の刻しより

義仲寺石 碑芭蕉墓
色としもなかりけり青嵐

晒井や浮世に似たる水こゝろ

涼しさやねる足出るか山清水

手付て光も黒一滴の上

嵐雪

なまなかのゑそらごとたる夜さし　（嵐雪）

虎の尾を綾くゝりぬ女しう

去の年の家を
おもひて
涼しさや人とる水の江

梦亡母
五月吾子我は蓑虫や母こいし

夏

器用
人事
人倫
飲食

塩魚の腹干すなり更衣

綿ハゆゑにすてたれと袷衣

硯する僧にうつし不重

五位ハ位色つきませよ青簾

浮巻木や斧み女の石を打つ

家事の紅巾さいきや汗拭

汗拭ひ小松にかけて沖津風

述懐
衣はとより紙みハ見ゑぬ帷きし

こかね
あるまて
五月雨に木の下闇の紙帳かれ

嵐雪

手枕に歌よみ顔の照射かな（嵐雪）
立臼も共に躍るや祇園の会
犬に似犬を追ふ夜の涼みかな
其後風の行く方や法師鳩
思ふ人まあるれ印地の矢疵
葵たゝることに目立や足揃

早乙女にかへてとりたる茶碗かな
みもなくに上もなし　惇立把

夏　動物

帰去来
帝を祝く
待の僧は逢音ときゝぬ時鳥
月代を月の障子せん時鳥
鳴る且夕里まで縋るらん
悼之
鳴入てわすれなすそれは子規
待乳山満
せいは墨に画読のぞきぬ子規
大勢の中へ一声松魚哉
鮓つゝく酒粕銚子与へけり
下闇や地虫ならふの蝉の声
さ侭さへ飢も絶ぬや山の蚕
あなめでしもうたよつさ蝉の声

嵐雪

笠ほして行くゝあるふ雀哉　（山嵐雪）

うつくしき姫猶ならぬ毛虫哉

蝿をうちき怒る心よ果ろ

ふる家や角なき日をおつ蝸牛

子子や水の行へのいろくし

鶉佗の鳴世をすの戸や時鳥

悼亡

下頭おに継くゞするりぬ仏

待乳山

舟はすをうて未暮程ない公

まるのこか　猿より蝿の狩花は

夏植物

古庵をあへ来りたる牡丹哉

虫の子や兜の首芋の子みしき

笋やかりかへ床の隅よりし

紙衣の箱に咲きり百合の花

しとうり庵のをもくに菖蒲哉

一刀尺せんあやめの九寸郎

家来やにし吸ひぬ青鬼灯

咒の人の面にしし旅る白楽哉

紫陽花を五寸にまふいや石枕

嵐雪

とゞけ見まかえ
ころ家亭
みるに末あかりれとそしし　寺の花

川芎のたまたまか白ふ咲りけり

梶原屋敷　あつき中に山あり花菖蒲

うらむきの枝ありけりを若楓

萍や何のくるものてあり

樗俳て（おし）わらひとめかりや芝肴

あやめふよ物やむ人の宿の上

山茱萸のかざしや重き不二颪

慈居もやうくえりされて

此頃ハ新妻くるゝ友もあり

若葉吹く風やたばこの刻みよし

（山風雪）

秋

（天地生物除）

嵐雪

七夕ハ隣とえふか浮世かな

七夕や鴨川わたる牛車

星合や瞽女も願ひの糸とらん

星合に我味方せん侍女郎

魂棚や家も泪も油うれ

魂棚や皆こま〳〵と茄子あへ

魂棚の西隅に先づいの字ハ

魂祭母居の妻との音ハ何

食物も皆水くさし　魂祭

折てハびく〳〵ものと刻りつ　返禮

ガラス使用

盆までハ秋なき門の燈籠かな　（嵐雪）
相撲取ならぶや秋のからにしき
我もらじ新酒ハ人の醒やすき
立出てうしろあゆみや秋の暮
秋のくれ石山寺の鐘なるは
八九月風やりんこのほらの貝
懐旧
からひける秋なりけるをこゝろのひて

秋
天文　地理

妙法ノ火
経をたく火のそゝとさや秋の風
作り木の糸をゆるすや秋の風
（秋風）の秋のこゝろ動きぬ縄すだれ
草の葉を遊びありけよ露の玉
（七夕）
真夜中やふりかはりたる天の川
大仏殿造営ありける年の冬ふ
あて拝み行くに富士筑波の間に
更に山一つ出来たるかといひしき
たる一ぎ能し紛　根の花たゞ出来かくそ
上野より道やつくらん天乃川
我や来ぬ一夜ハ泉天乃川

嵐雪

（嵐雪）

名月や柳の枝を左へ吹く

名月や煙はひゆく水の上

名月やおづまでとつて暮る妻をうぐ

名月は峰も及ばぬ木末哉

我船のしつとしみゐる月見哉

常陸の鮭鎌倉の鯉
あの鱸をまはのしれぬ
古郷の鱸鱠つゝみ一つに姐板をならし
なつかしく流れしもあれ一年の名月頭ゟなり

馱しくは吐してすゝめぬ今の月

名月の園友坊は男かな

清原紫震殿の前子
仰ぎ見られたる中に

新月や内侍所の棟の草

面白く富士にすぢかふ雁かな

秋

動物
木

常燈や壁あをかにきりぎりす

ひとり旅蕪柳吟ずる人は誰

いの栗やよにさゝげたる法の花

水鶏も能さびけりな山里は

汐魚つる巾　水村山廓酒旗風

栖のから古郷の山の木の實かよ

茶碗銘

松虫のりんともいはず黒茶碗

苫の湯に地獄めぐりといふあり
あはれしは迎の變化画図なんし

さま〜餓鬼に似るよ茸

後此

花の芽このみを名をたに流る流

鵙なくやまだ明星の入残り

嵐雪

ガラス使用

嵐雪

木犀の晝はさめたる香炉かな（嵐雪）

宗祇家石塔を撫でゝはやすむ一葉かな

単然上人の岩窟まで燕の帰り路あり洞の雨

秋草

嵐雪

まゝハ其のんならしいや女郎花

ひとつをもてあつかへる西瓜かな

品川へ二里の休みや花すゝき

野宮
嵯峨中の淋しさくゝる薄かな

蟲の詠のあり蕎の無の裏表

鴫原の外も深るや藍はたけ

黄菊白菊其外の名はなくもがな

悪ハ讃る菊ハうなつて仏離かな

鶴の聲菊七尺のながめかな

花薄招子つれなく成けり

ガラス使用

鐘に出て世の中ハ田も晴もなし　（嵐雪）

朽木となれはしめされて榎茸

蒼浪にのぞみたくらり菊のきし

九月十日
素堂亭にて

かくれ家やまあ世の中に咲る菊

松風の里ハ籾する　しくれかれ

菊咲けり蝶きて遊べ繪の具皿

菊買ハ又甚泰にすけし人なからん（ヤイ）

書を抽（ヌキル）芭蕉に睡れ菊乃児

信濃催馬楽　辰末すバ宋粉にせん信濃の真蕎麦　初真蕎麦

蜂ハさし蝶ハ咶るや菊の花

羽黒西川房　山路經るこゝちや菊に松茸

冬

天文
動物

風に枯の柳ちん名諸かれ

鵜鴨の聲ふり渡る月夜し

酒乃余喰ひハまこなひものゝお命講

霜解の風やつゝむ生姜味噌

川の雪白と盥乃洗ひ哉

武士の足て米まく霰かな

義仲寺

雪ハ申さんとよぎ紫のつくゑ

其下かうして眠らん雪仏

霜の笠杖をたくれハ折れし

白ハ生してをくをうらん玉霰

嵐雪

蛤ハ牡蠣にかくらしむかしかな　（嵐雪）

以上芭蕉の句を相見るに
あまた萩を土る方のあれは有り候

道寄

風の吹いつしろあめにさ
ふ花は月もつれとなし
まろくれ尾の道すち行たまの
古寺に有をくさき池の路

冬

（天文除
動物除）

古暦はしき人にはまゐらせん
新の枚葉を探した荒野なり
霜菊を居る姿や東山
黒うしまや家に入ても菜桶
ひとしきりゆきのくらし鉢叩
山伏のこゑるゝに出て師走かな
猿猴のまた目をかるや年の暮
思ひ出すと妹つくろひぬ少しつゝ
古足袋の四十に足を蹈込ぬ

嵐雪

悴ぬ陸中にて三重北り耐へかり

深着世界無悪心（右）

つまをも親しあらしぬれば徒らは（山風雪）

椿の来てまはりまはる金くい

須广の石しあまんや宝舟 ・（元禄年中）

大黒賛

神の酒ちるよき女房をもちし

懸女房

三合子（がうし）事たらはずや女の年

水仙やゑへいまゐるは花死れは

比丘尼の米えるべきさは

足袋もきて居る樒隔ての諸ふし

松屏の日そしめ鷺の土蜘蛛

亡師追悼

なき人の裾をつかめん納一至る

河合曽良（宝永六年十月歿）

春

くりかへし麦の畝ぬふこてふかな

春の夜は誰か初瀬の堂ごもり

生絹の色のへらぬや梅の花

病む僧の庭をはく梅の盛りは

大峯やよしのの奥の花の果

黙るや雨の明れぬ二子山

理具合書画なきまゐれ春の末

垂釣する人は千代の姿かな

鶯や上毛しぼれる白あがり

衣装して梅かたもしる匂ひは

夏

（首の並）越えて行く鳴る汗哉

しら濱の日を木陰に鳴る

（松竹見の暁子もの哉も蛙も歌とよめりけれは）

松竹の鶴にもをかし時鳥

涼しさの比く庵をまくすまし

やれ垣やわさと荻の葉ひたく

卯の花の菓子にたり見るも哉く

涼こそある杖ありあり寺やささこみ竹

月淋や児の額か麁化粧

蒼虬

（舞扇にも見送て、）なつと出て菓より惣五月雨

ガラス使用

光明寺行者を
おなじ
汗の香に衣ふるはん行者堂

旅衣早苗につゝむ食乞ん

月山や鍛冶の銘とふ雲晴れ

三日月や雪にしらけし雲の峰

象潟や[illegible]色の土産も明かし

此川や[illegible]れわたる袖のうら

（曾良）

お宴
涼しさを[illegible]ひ出して枕とらん

白川の関こえて行は[illegible]の古実
[illegible]

卯の花をかざしに関の晴着かな

うき村は墓のまとまれる[illegible]
（[illegible]まで）

[illegible]つく入れて[illegible]の海　カ

秋

掛付し[illegible]のたわむ秋の風

ゆきゆきて倒れふすとも萩の原

よもすがら秋風きくや裏の山

[illegible]居て[illegible]いづる月見かな

向のよき宿も月見る契りかな

何魚のかざしに高き菊の枝

終夜[illegible]
[illegible]しさし[illegible]へぬ[illegible]

[illegible]やする蛛の巣ゆくむれの月

[illegible]の中[illegible]
秋の田にきこえぬ[illegible]の気

[illegible]せよ下[illegible]のしをれし萩の露

曾良

山中湯
秋のあはれ入かはる湯や世の気色

素堂母七十賀
動きなき岩揺るや年の床

（曾良）

冬

伊賀
なつかしや奈良の隣の一しくれ

雪いまでかれ木まじりや山霰

海尽や邑をくつすむらふゝき

むつかしき指をりも見えず里神楽

鹿竹亭の会
亀同じ我身のあとさき紙衾

こねこりつまれし師走の餅のさま

さらけも見とゞく雪のみくれぬ

三笑の花様々なる衣くばり

達磨忌や梅の紙も一さくり

曾良

ミノ

梅花鳥落人惟然（廣瀬氏）（宝永七年五月廿七日没）

南部に年をこえて（類題）
二本松
まづ米の多いところで花の春（　　）

春（植物さし）

諸聖廟
如月や松の苗うる松の下（句集）

行く春や寝覚きたなき宵の雲（　　）

出羽にて
あと和かな事ならハうか田打鶴（句集）

宵闇ハ朧に出たか出でい見よ（　　）

馬の尾に陽炎散るや晝をい多葉粉（句集）

ある時はさそな天狗も八重霞（　　）

惟然

我跡て世を忘れけり羽黒尾

（曽良）

鶯や笹葉をつたふ湯たて曲突（　　）

丈草の庵をいつる時
鶯に又来て寐ばや寐たい程（　　）

鶯の薄壁漏す初音哉（　　）

鳥散す檜木（ヒノキ）の中や雉の声

山の幅啼きひろげけた雉の声（句集）

飛んで又緑み合ふや松むしり（　　）

風呂敷へに落ちよつゝまん夕雲雀（句集）

燕や赤土道のたゝあつさ（　　）

衣更着のかさねや重き蝶の羽（　　）

春

木（櫻花ナシ）

梅咲くや赤土壁の小雪隠

梅の花赤いは赤いは赤いはな

梅は梅で花の時なら猶遊ぼ（　　）

思ふさま遊ぶに梅は散らば散れ（ナし泊船）

静かさの上の静かや梅の花

新壁や裏もかへさぬ軒の梅

宗鑑の陳蹟を尋ねて
梅散て観音艸の道の奥

深川の舊庵に入て
こゝらにハまた〳〵梅の残れども（　　）

ガラス使用

一　梅の画

梅の花あの月ながら折らばやな

まだ山の味覚えねど松の花

春

櫻花

草

かう居るも大切な日ぞ　花さかり（の陰）（句集）

我侭になる程花の句をさらり

こよひ智積院の鐘聞今朝まで其元の事とも益御無事之旨承知い
秋与風頂戸明石の初花一両日以前にあわて東山に飛まされハ

花もなふまこ一しの気かまたたん陰

（久世よわりえていつ方にてもはうりと伏申お別のこと大雲様近日
御下ると成けれはすて我らもと三月廿日東　睨丸　惟然

冨貴なる酒屋に遊びて文君が爪音も
酔のまぎれに思てらるに

酒部屋に琴の音せよ窓の花

上市にとまりける夜ハ雨ふりけるた明て晴わたりけるすの川を
渡れバ口の花ハ散り過て匂らぬころはいみなりぬそれよりていた
たいりにもいれバ花も奥あるにしきみて白ふ許りに咲わたりぬ猶山深く
入れバ円位の住める蹟とて幽静の谷あり鳥静まり処ミ花はのなげすて暫く此庵に
眠れバ心空しく万事を休す

今日といふ今日此花のあたたかさ

ガラス使用

惟然

春

丈草に扇開くや花の下（

芹薺踏みよごしたる雪の泥

踏み分る雪が動けばはや若菜（　）

山吹や水まいたせる燵はし麦（句集）

菜の花の匂ひや庵の磯畠

夏

道問 雉鳴や枝踏ゆる紙帳こし

ん友ハ翁は岐阜の御坊にしばらくありて史邦吟士に別る

見せむやな茄子をちぎる軒の畑

起臥みだれし蚊帳も破れぬこし

我寺の萩ハ杖になりにけり（句集秋）

掃しみの（やつるゝ）手ことこきたらうき（句集）

ゑ葉やふく〳〵（れきう）と〳〵あつまり（句集）

なる〳〵と白し〳〵しなう

掃しての大井川（　）

ゆふ蛍や麻の葉毎に向ふ多原

榊こハ帷子かゆる今日掃除

夕白雨拭ひし濃き葉のなひ

玉江にて

貴たちよ玉江の麦の刈しまひ

時る二つの橋を渡る人京（　）

砂まいを山すし舟のりかな（　）

惟然

奈良の万僧供なる詣でしけるとけに一夜をあかしぬれ。明そあした
つの笛つき鉢見しあけれは枕よりぬ吹きになふきたに未終のうれ
出侍りる　短夜や本僧もなさすこそえん迄（惟然）

山中に入湯して　こゝもそれなれて家自ら（の）（許六迄）春風　ナシ
夏草に肥たり蕗のもり旅　ナシ

於知足亭　涼よふの星崎とやらさてどこじや
沢水に米はうぞらん燕子花
かるの子や首さし出して浮藻　44

追善　追つかん誰ややうでぞ夏の月

故郷の空をあやしてあれ夏の雲又雲のうさるれて
四日市にて　涼しさよ饅頭くふて蓮の花
筍によだれて坊のはらきす
蓴菜や一鎌いれし沢のひま
岸泳鳳叔子の亭を訪ひし夜川風涼しき橋椅子に趺て　すゞしさや海老のたね出す星曇り

秋

（天文、植物ナシ）

のどかなる秋とや蛸も壺の中　ナシ
肌寒きはじめに赤し蕎麦の茎
伊丹にて　秋晴れたあな鬼貫の夕やな　ナシ
なほ秋に竹のしなりのしをれ
奈良坂にて　知る人に（近付に（句集））なりて別るゝも案山子かな
悼少年　悲しさや麻木の箸もたどるゝみ
七夕や先づ寄あふて踊り初
粟の穂をこぼしてこゝら鳴く鶉　ナシ
夕暮を思ふすゝにも鳴く鶉　ナシ
粟の穂のぬくみ入たる鶉かな　ナシ

惟然

惟然

行雁の友のつたふや魚の棚　十こ　春カ

夜嵐に尻吹きたてる峰の鹿　十こ

世の中をはいりかねてや蛇の穴

磯際の波に鳴き入るいとゞかな　十こ

張り残す窓に鳴き入るいとゞかな

田の肥る藻や刈よせる磯の秋

粟津にて　今なすらん落ちはなされし田刈時

此冬の寒さも知らで秋の暮

秋

天文
植物

酒田夜泊　待つ宵や流浪の上の秋の雲　十こ

出て見れば雲まで月のけしきかな　十こ

松嶋や月あれ星も嶋も飛ぶ　十こ

塩竈の庇のぞかんふゝ乃月

更け行くや水田の上の天の川　十こ

湖辺　八景の中吹きぬくや秋の風

朝露にいざり車や草の上

竹藪に人音しけり梳葉

廣瀬氏の別墅を蘇山とも云
又ハ松山ともいへり
秋にのぼる雲の下のハ木曽山か

物干にのひよる梨子のかれ枝　水

惟然

惟然

翁を阪の下まて別るとて
別るゝや柿喰ひながら山の上

一くゝり草紙やしめる木槿垣（ナシ）

喰物もありや松尾の柏團栗（ナシ）

翁弥江に先立て奈良一宿仕重陽の日ゟ大阪着仕候 翁「菊に出て奈良と難波は宵月夜」此句にて会など有之候 先の奈良哉にて（此下寒山子句アリ）
銭百のちがいが出来た奈良の菊

行尊塚
龍膽も幸あるにいざ折らん（ナシ）

猶月に[illegible]るや美濃路の芋の味

伊賀の山中に阿波の閑居を訪ひて
松茸や都に近き山の形（味句集）

芭蕉翁の伊賀へ入し給ふを路外まで送りて
先づ入るや山家の秋を早稲の花（ナシ）

稗もげる世の中よかれ最上川（ナシ）

冬

時候
地理
植物

看病
引なりて蒲團で寒き笑ひ声

稲荷堂ニ詣る
撫房の寒き影なり堂の月

銭湯の朝かけ清き師走かな（　　）

茶を啜る桶屋の弟子の寒さかな

天鵝毛の財布探りて年の暮（　）

年の夜やひきむすびたる纘守

年の[illegible]雲故郷に居てもの〻旅（[illegible]集）

寺元政法師塚
竹の葉やひらつく冬の夕月影（白集拾ひ）

曽祢松
曽祢の松これも年ふる名所かな

惟然

ガラス使用

惟然

欲填遣疑尺蹤設

水草の蕊をまかれん薄氷

鵜の巣の白き梢や冬の山

萩枯れて奥の細道何処へやら（句集秋ノ）

寒い日にきつとかましや枇杷の花（類題発句集）

於義仲寺六七日

花鳥にせがまれつくす冬木立

ゆつたりと寐たる在所や冬の梅（　）

しがみつく岸の根笹の枯葉かな

枯芦や朝日に氷る鮑の貞（　）

何事も言ざらぬ花よ水仙花

水仙の花のみだれや藪屋敷

冬

人事

天文

動物

春にならば旅立んといふ人のもとにて

臘八やけさ雑炊の蕪の味

煤拂や折敷一枚踏くだく

春かけて旅の萬歳年忘れ

芋鱠汁は宗因の洒落奈良茶漬は芭蕉の清貧

節季候や畳へ雞を追ひ懸ける

冬こもり人にものいふことなかれ

奥州ある寺にて越路をきて（句集）

ありようする鶯は誰や雪の朝

木 薪もわらん宿のせ雪の静さよ（句集）

わざ〳〵逢ひにとて来りし娘子示す

遊びやれよ遊ぶぞ雪の徳者達

重たさの雪はらへどもはらへ（ども）

万句興行

初霜や小笹がしたのゑひ蔓

惟然、

ガラス使用

惟然

（有千竹金　不如林下貧）ひだるさに馴れてよく寐る霜夜哉

凩や刈田の（あとの　畔）鉄氣水（句集）

（娘にあふて）両袖に只何となくしぐれ哉

鵯や霜の梢に鳴きわたり

晩方の声や砕る鷦鷯

（翁病中祈祷）足がろみ竹の林や鷦鷯（句集）

水鳥や向ふの岸へつういつい

水さつと鳥はふは〱ふは〱

（世の中は走ると思ふし金銀を貯へ人をめくる事もあらず己をも苦しめん　より貧しくて心にかゝる事もなく氣を養ふるはしかし学覚して身を行ふべからん　より知れして喜ぶるべし）
人はしらじげに此道のぬくめ鳥

森川許六（正徳五年八月廿六日歿）

春

時候
天文

春立つや歯朶にとゞまる神矢の根

懺法のありし過ぎたる日の永さ

酢味噌あふ春の野守となりやせん

二番にて春はくれけり紀三井寺

行く春やまゝ追分の油あけ

行く春に佐渡や越後の鳥曇

けふきりの春の行くへや帆掛船

猫の毛のたらりとわれて春の風

ガラス使用

灸の點干ぬ間も寒し春の風（許六）
掃ためを捨てかけておく春の雪
春雨やたれ／＼の金屏風
陽炎や壁のぬれたる夜乃雨
陽炎や破風の尾は如意宝珠
黒土の庚申塚や朧月
清水乃上から出より春の月

春
人事

大坂討記
五十四石

伊勢海老の鏡開きや具足櫃
干鮭にかへてや蝦夷が着衣始
古猫の相伴にあふ卯杖哉
出代や傘提げて夕詠め
出代やあはれすゝむる奉加帳
出代や給仕しまふて暇乞
木佛は殊勝過ぎたり涅槃像
百姓の娘乃出たつ彼岸哉
入相の雛や八鴻の破れ口

ガラス使用

大阪訂記
五十四丁之

春

動物

草

首どもハ再び生えず春の草

菜の花や豆の粉飯の畫げしき

ゑんどりの年玉こぼし先ひ芹

鴬に道であひけり丹波越

羨まし年の若きに獨活嫌ひ

田樂や何もくれへ義雲雀

苗代やうれし白にもなく蛙

八橋や田許りあつて鳴く蛙

麦たれや田の青芸に（行）鳴く蛙

蕗の花さすや若菜つみの荷ひ籠

許六

（許六）

髪のなきはなすくれと
いふ殺のかくよ

髪よの小鍛冶や住しき鉢たゝき（許六）

嶋の帰さ柳つたる紙衣かな

伊勢奉納
青海苔は和光の塵のひかりかな

住吉法楽
御河や苔になかれて鳴くも雁

月り花る悲しき下手の蛙かな

角大師井手乃蛙の干乾かな

天の岩戸ゟ入る
陽炎をたよりに上るこそ庵かな

穴蔵と見れバ恐ろし雉の聲

春木

ちるもはやはせ賣る里の梅の花

くわらりと梅の覚るや梅の花

梅うるしにこき花色の小袖かな

深川懐旧
豆腐屋尼もし昔の顔や檐の梅

唐人のうしろ向きたる柳かな

五老井記
水筋を尋ねてみれば柳かな

都へ学問によりたる
儒士のおくりし
本箱にまつなる桐の若芽かな

無息に春の巻柳や宇治の山

茶のちるをたゝつてぬるや山桜

百石の小村を埋む桜かな

許六

ガラス使用

櫻ちるや越後のあまり（許六）

伊勢ハてる馬子の陰荒や花曇

春雨の縒すも濡す衣かな

読宮の鐘が鳴るなり花曇

筆とくに我いそかしや花盛

（五十米の為に孫を持て悦し）

忍ぶする妻に似より利根の花

（越後の孤寒之道といふ所静かる所の[illegible]をとめてみし寿楽の方で[illegible]といひけれて）

細きるかたに雨そゝけり木瓜の花

ちりし後や売せ走る里の梅の花

梅か香や客の鼻には浅黄椀

甲斐郡内を過る

道ばたに繭干すかさの暑さ哉

夏

（人事ナシ
生物ナシ）

鵜飼のふとり姿や五月雨

旅行

涼風や帷子足をふきかけそ

涼風や青田の上乃雲の影

夕立にをどり出てけり心太

夕立に鍛人[illegible]乳母の雨やどり

夕立や女の金持の兆めるとき

夕立の雲や曽根太郎曽根次郎

許六

国中や青田にうつる雲の影（許六）

我あとへ猪口立ちよる清水哉

夏

人事

群烏賊や世ハ白妙に更衣

人先に医者の袷や更衣

上一つぬいで大工の更衣

佛法を裸にしたる産湯哉

木曽

山吹も巴も出づる田植哉

産月の腹をかゝへて田植哉

胴亀やきのふ植ゑたる田の濁り

七段の外を乗りけり足揃

麦あらの田植や遅き螢時

蚊遣火や麦粉にむせる咳の音（許六）

ガラス使用

許六

夏

閙かしきから団ふその團扇哉（許六）
何思ふ長雪隠の渋團扇
加茂祭
武士〳〵と養子もらふて祭哉
一竿ハ死装束や土用干
山伏の髪すきたてゝ夕涼
小間物をおろす石あり門涼
半夏生水や野菜のきれる竹生嶋（類題発句集）
爪紅の指てつまむや嘉祥菓子

許六

夏

生物

四五月の卯浪さ波や時鳥
瀬田にて初音を聞
時鳥瀬多ハ鐘の自慢かな
蛇の衣ぬきてかけたる桜かな
蚊遣の煙にそるゝ螢かな
宇治川の螢ハ三位入道の亡魂なりと
かしこまた合戦なしに飛螢
木曽路
かけ橋やあふなけもなし蟬の聲
卯の花に芦毛の馬（駒）の夜明かな
妹の子たゝみをする猫のたはれかな

西東ハ借銭の牡丹かな（許六）

蝋燭にしつまりかへる牡丹哉

日あたりや借庵のうらの杜若

ちさハ搽えりけり杜若

上野より武蔵よ入りて
熊谷のつゝみよれバ芥子の花

石竹や紙帳して見る家の西

晝顔の果も見えざりん太

夕顔や一丁餝る夏豆腐

宿ゝハ皆新茶なり麦の秋

秋

（天文植物なし）

鵲の橋や継父の百人一首

鳴田人麿寺の道
火に感ることあり
聖霊をすらで越（り（俳諧問答））けり大井川

出代や曲突におちるきり〳〵す

干鮭の目へかんだる竈馬哉

挑灯に跳あげの泥や踊道へ

秋の夜ハ床たらぬ人の出るとこよ

裸身に麻の白ひや角力取

八朔に斫りのきるゝ鰯水ら

大きなる家なれど秋乃夕かな

小男共やころびうつたる蕎麦畠

許六

ガラス使用

自画賛　白雁や黒き馬をたどす夜のこゑ（許六）
若雁の聲もの重なる夜寒哉
藪入に戻つて京の踊り哉
大名の寝間にも寝たる夜寒さ哉
くらき経芭蕉にひゞく虫の聲
のりうつて裏ふ菊や秋の花
松虫の鳴くや板食の茶碗五器
下帯ハ尺事ちいくも京角力
七夕や一半仲か子の年　上

秋
天文
植物

許六

血をこぼすよ員の萩や花芒
世にあはゞたれかれくらす西瓜哉
一畑にかゝしを立る野分哉
明月や十一夜くもる天つ雁
辰や蓼くらひしあぜに秋の風
欄干にのぼるや菊の影法師
芋を煮る鍋の中まで月夜哉
ない袖をふつて見せたる薄哉
焼き火に団扇あてけり秋の風
明月のこぼしめぐみや菜大根

いざよいや有馬を出て悩む人（許六）

緒州の石田の鴫やこぎれ不

李由母年回

唐がらし葉つみ水汲む済の人

針立の指でしはいふ霧ん

葉林のうらを見せけり風の秋

宇都山

十團子も小粒になりぬ秋の風

山科や五荷三束ね菊の花

峯入の笠とられたる野分かな

冬

時候　天文　地理　植物

行年や多賀造営の訴訟人

血の附きし臭残さき枯野哉

すゝとなれ心ぼそしくれかな

初雪やまず馬屋から消そむる

初雪や鐘で死たる人の墓

出女も出代り白歯年のくれ

寒山と捨得とよる並菜ふ捲

寒菊の隣もありや生大根

秋草の垣根の雪や初しくれ

初雪やくらひもあへず鳴

ガラス使用

亡師一周忌にまつりける
画像をうつして

紙衣の影をうつせし姿かな

水風呂に坊の首たる霜夜かな

深川の庵に
おもむきて

凩やあとにひかゆる富士の山

杉の葉の赤かる方や冬の暮

大髭に剃刀のとぶ寒さ哉

去年の雪の門を訪ずとて
青子に句をとられける時

十団子もあまたにこゝし雪乃門

旅宿

大名のあるたびまたる寒さ哉

連歌師の去年とやいはん冬の春

亡師追悼

一夜の医者よろこぶや（もののけむ）帰り花

初雪や治まる江戸の人心

（許六）

許六

冬

動物
人事類

寒声ハ葬礼が来てしまひけり

能弁また言ひ出すへきりきりん

婿入の門はいるまぎれ鉢叩き

禅門の革足袋おろす十夜哉

同見たに山三井寺の大根引

出女になげて通るや大根引

餅つきや犬の尻上る杵乃先

示小坊
阿蓮題

訴を壺に聴くなり節布子

膝ハや猫をまずれば（貨をさぐつて入れバ）納豆汁

埋火や蒲団を通す炭の匂ひ

ガラス使用